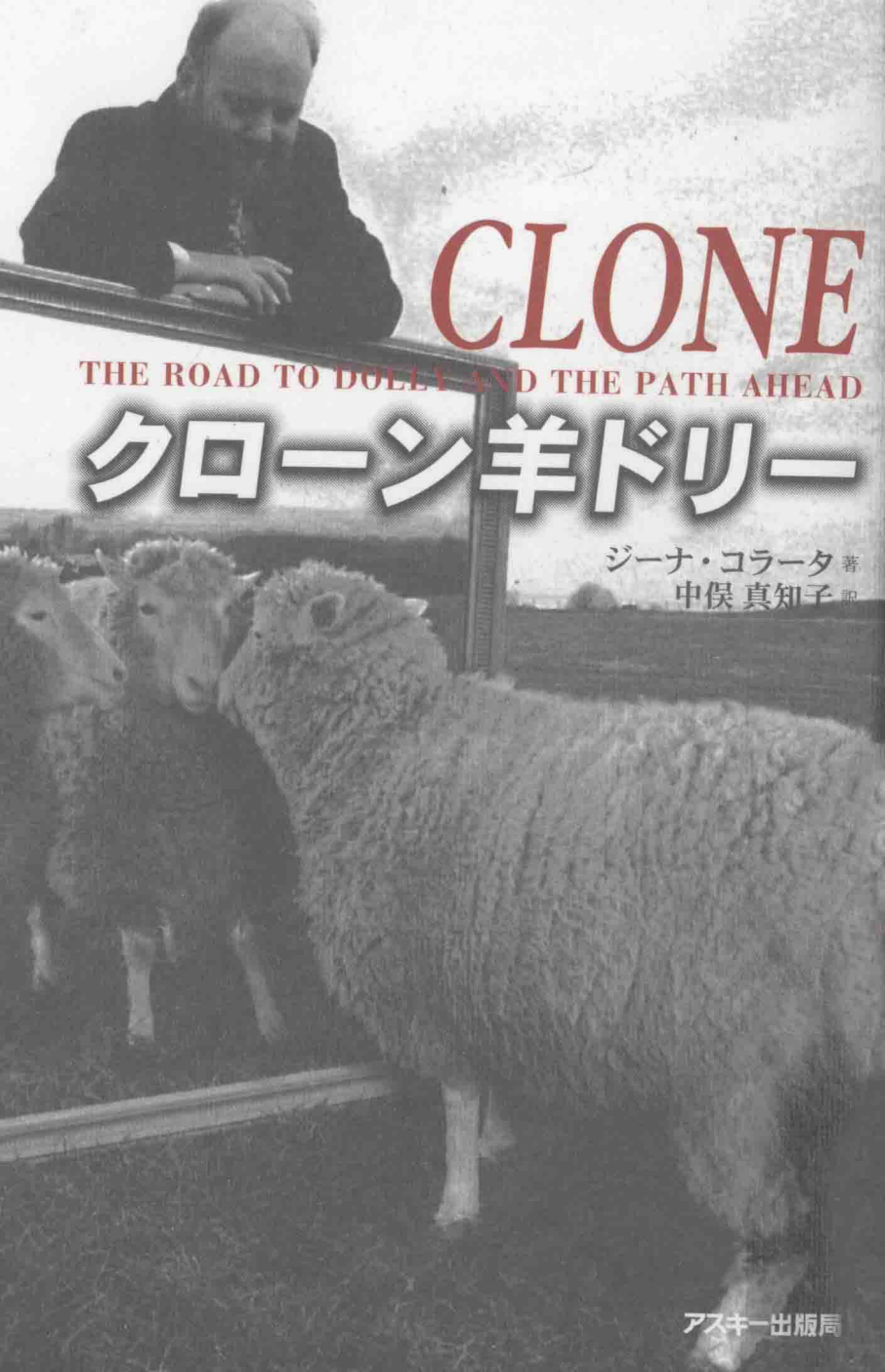




CLONE

THE ROAD TO DOLLY AND THE PATH AHEAD

クローン羊ドリー

ジーナ・コラータ 著
中俣 真知子 訳

CLONE

THE ROAD TO DOLLY AND THE PATH AHEAD

クローン羊ドリー

ジーナ・コラータ 著 中俣 真知子 訳

アスキー出版局

クローン羊ドリー

一九九八年三月十一日 初版発行

著 者 Gina Kolata

翻 訳 中俣 真知子

発行人 橋本 孝久

編集人 佐藤 英一

発行所 **株式会社アスキー**

〒二五二一四 東京都渋谷区代々木四丁目三十三番十号

振 替 00140-7-161144

大代表 (03) 5351-8111

出版営業部 (03) 5351-8194(ダイヤルイン)

GPC書籍編集部 (03) 5351-8106(ダイヤルイン)

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の二部あるいは全部について株式会社アスキーから文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複写、複製することは禁じられています。

落丁・乱丁本は、送料当社負担にてお取り替え致します。
お手数ですが、小社営業部までご返送ください。

印 刷 図書印刷 株式会社

編集協力 岩崎 義人

編 集 佐々木 敏久

装 丁 アスキーデザイン 山本 恵美

ISBN4-7561-1759-7

Printed in Japan

● 1130605

目次

謝辞 5

第一章	世界を変えた偉業	11
第二章	報道協定破れる	39
第三章	奇想天外な実験	67
第四章	倫理学者の登場	103
第五章	『複製人間の誕生』	135
第六章	疑惑のクローニング実験	173
第七章	エキセントリックな天才	221

第八章	ドリーへの道	257
第九章	クローン羊をめぐる狂騒劇	287
第十章	クローン人間は生まれるのか？	313

解説	341
----	-----

訳者あとがき	345
--------	-----

引用文献	351
------	-----

本書関連年表	353
--------	-----

索引	358
----	-----

クローン羊ドリー

CLONE
THE ROAD TO DOLLY AND THE PATH AHEAD

Copyright © 1997 by Gina Kolata.
All rights reserved.

本書は、株式会社アスキーが米国Brockman社との契約により翻訳したもので、
日本語版に対する権利・責任は株式会社アスキーが保有します。

CLONE

THE ROAD TO DOLLY AND THE PATH AHEAD

Gina Kolata

ビル、テリーズ、そしてステファンに捧げる

謝 辞

本書を執筆するにあたっては、すばらしい人々と出会うことができ、科学者ならびに科学者以外の方々から予想をはるかに上回る心やさしい助力をいただいた。

本書で引用させていただいた現存の科学者のひとりひとりに対して感謝の気持ちを伝えたい。いずれの方々も、インタヴューを快諾してくれただけでなく、他の文献には記録されていない歴史の断片をつなぎ合わせる作業に手を貸してくれた。とりわけ、各章ごとに科学的な正誤をチェックしてくれたロバート・マキネル、ランドール・ブレイザー、ステイーン・ウィラドセン、およびシャーリー・ティルグマン、さらには、歴史的に貴重な資料の個人ファイルを提供してくれたダヴォール・ソルター、数かぎりない専門的な質問に辛抱強く答えてくれたリー・シルヴァーに、この場を借りて心から謝意を表したいと思う。

また、本書はアレクサンドラ・ナイバーグの助けがなかったらとうてい書けなかった。彼女はめったに見つからない文献さえも、熱意と根気強さをもって探し出してくれた。

最後に、いつものごとく原稿の一語一句に目を通し、洞察力あふれた意見を聞かせてくれた夫のビルにも感謝したい。

目次

謝辞 5

第一章	世界を変えた偉業	11
第二章	報道協定破れる	39
第三章	奇想天外な実験	67
第四章	倫理学者の登場	103
第五章	『複製人間の誕生』	135
第六章	疑惑のクローニング実験	173
第七章	エキセントリックな天才	221

第八章	ドリーへの道	257
第九章	クローン羊をめぐる狂騒劇	287
第十章	クローン人間は生まれるのか？	313

解説	341
----	-----

訳者あとがき	345
--------	-----

引用文献	351
------	-----

本書関連年表	353
--------	-----

索引	358
----	-----

クローン羊ドリー

第一章 世界を変えた偉業

「これは神に感謝してもよい奇跡なのか、わたしたち自身が神のようにふるまうための不吉な新しい手段なのか、大勢の人たちが考えあぐねています」

——ナンシー・ダフ、プリンストン神学校

一九九六年七月五日午後五時、穏やかな夏の夕暮れどき、歴史上もつとも有名になる羊がこの世に生を受けた。母胎から最初にあらわれたのは頭部と前脚だった。

スコットランドのロスリンにあるロスリン研究所から少し離れたところに建つ畜舎で、羊膜に包まれて誕生した子羊は、実はこの研究所で「つくられた」のだった。もつとも、子羊のつくり手である、物静かで頭の禿げかかった五十二歳の発生学者イアン・ウィルムットは、ドリーという名がつけられるその子羊が生まれたとき自分がどこにいたのか覚えていない。そればかりか、ドリーの産みの親の

羊を出産までずっと見守ってきた科学者のジョン・ブラッケンから電話を受けたことさえ思い出せない。そのときブラッケンは、ドリーが五体満足な健康体で誕生し、体重が六・六キロ（十四ポンド半）あることを伝えてきたのだ。

誕生の瞬間は驚くほど静かだった。シャンペンのかさを抜く者もいなければ、写真を撮る者もいなかった。そこには、研究所から来た二、三人のスタッフと出産に立ち会った地元の獣医がいただけである。ドリーはどこから見ても、なだらかなスコットランドの丘に放牧された何百匹もの他の子羊と変わりがなかった。しかし、灰色がかった羊毛と真っ白な顔を持つこのふくよかな子羊が、やがて世界を変えることになる。

いつかわたしたちの時代が歴史の一端として記されるとき、この静かな誕生の瞬間——小さな子羊の製造——は突出した出来事としてそこに刻まれるだろう。こうした歴史を揺るがすような出来事は非常に珍しいし、予測しがたいものである。

二十世紀を振り返るとそこには、量子論、すなわち目に見える事物の通常の法則が原子の領域には適用できないという物理学の革命的な発見があった。また、時空をワープできるというアインシュタインの一般相対性理論が生まれた。善悪のどちらにもなりうる原子核分裂もあった。また、しばしば見落とされることだが、不可知の真実が存在するとした数学者クルト・ゲーデルの、証明も論駁もできない定理も生まれている。さらに、西洋社会に変革をもたらしたコンピューターの開発もあった。

生物学と医学の分野では、一九四〇年代にペニシリンが発見され、一九五三年にはジェイムズ・ワ